



卷二 春歌下
 卷三 夏歌
 卷四 秋歌上



遠山揚をアキ
 よめいふふちと
 のうらふちと
 つふのちと
 するのちと
 ちと
 おま
 さ

頭書古今和集巻二

春歌下

歌一

よき人



東山を山の揚をふらふらとやそふハア

○ 霞が夕ナビイテ 其カス色ノウツテ見ユルアノ山の揚ハ

ナガチラウイテヤラ霞ノ色ガカハツテキタ

まてといふよふあでとあつちあつち何と揚をふらふらと

○ 千リカツク按ニ向テ 六ラクチラスニ待テクレトスノラ

入レテソレデハレテモチラスニ留ルモノナラハ何ヲ揚ヨリマ

めをばあめのかう
のふりこいさかい
こいさかい
その上の羽撃り
てそこをうりす
るふりこいさかい
のふりこいさかい

サツシモノギヤト公ウグソシバモウ世中ニ接ヨリケサツクモ
ハアルマイニ惜イニ早ウキバツカリガアツタラ接キツキヤ
のふりこいさかいでまき梅をか有てよの申をそれるふりこ
○ワルウカツテウキト残ツテアラウヨリサツカリト残リナシニ
早ウキヌテシウガサア、ケウカウナフチヤ接花ハ世
中ト云モノハソウマイ何デモ長ウアバカテス、シニイ
クチガワルイ物ナバサ

此果たバね、ぬへーまろくまちりのまびよ家流はなして
○コヨハ此里テト、ラウフ、カ、此ヤウニオモシロイ接花ノ

ふりこいさかいハ世の中
冠弁あり、く、敷
き身の糸殿の
世の中、ふりこい
古今集の、ふりこ
わりて、ハ、即、梅、乃
り、あ、け、よ、登、屋、を、
ふりこいさかい、ふり
こいさかい
この世の中、千、林、の
ん、子、ま、し、り、く、ま、
と、う、ま、ろ、く、ま、ち、り、
都、を、あ、ら、ま、り、ま、
こ、い、り、あ、ん、又
ま、ろ、く、ま、ち、り、の
友、あ、れ、ハ、何、と、也

チルキレ内イヌルヲズビダサズニサ
ふりこいさかいの世も似るる花も、咲くと見、ふりこいさかい
○接花サ、咲イタワト、ス、フ、タ、ウ、チ、エ、ハ、ヤ、カ、タ、一、方、カ、ラ、接、花、ニ、シ
シウタワイ、人間ノ生、今、ト、バ、ナ、テ、モ、チ、イ、モ、ノ、チ、ヤ、カ、ソ、シ
ニ、テ、ヨ、ウ、似、タ、フ、カ、ナ
傍道過服子よまておろりる
こいさかいのこい

○通昭師カ大方ヲ花ヲ見ニ来テクレラレ、テアラウト、ムフ
揚屋友まろ、形んち、び、ま、ろ、く、ま、ち、り、乃、事、く、も、な、ま、ろ、く、

わづらひの心
ゆふまき

テ毎日くくテトモ見支^り 夕^ぐテ見支^り又カス^るモウ大
方見支^り又デアラ^ら スレヤヨイワ桜花ヨ^クチルナラ^ば 様を
ニ取テ^リトウサ^シオラスニアツタテテ在^る所^ノ久^クカ^キテ見^えモ
セヌニカヤウニヨ^クハ^シユエ^キ目^ミニカケ^ル巴^上

ぞ其かん^ハ全^クの
糸^ノの^ホ切^リま^ま
糸^ノ存^在

ウツリ 雪院^ノもく^くさ^らの^ま此^れち^りら^らと^てん^てよ
め^る そう^くは^解 承均

梅^子の^こころ^ハ東^あか^る書^きあ^りつ^く消^えそ^めす^か

○桜花^ノチ^ル所^ヘキ^テ見^え 時^前ハ^春テ^アリ^ナカラ^雪消^え
チ^ラク^トフ^ツテ^キニ^キエ^スキ^ニ ま^ら雪^ハツ^ク消^ルキ

ガ^レニ^コレ^ハ正^ノ雪^ニナ^イ桜^ハナ^ガヤ^ニヨ^ツテ 千枝云初二句
ハざらるる花の

ち^りと^らら^らの^りや^てあ^るを^さハ^スが^まま^ま
を^まま^まと^しま^まよ^まま^まの^りあり

梅^のま^まち^りら^らの^まま^まと^てよ^まけ^る

そせいのう

このま^まハ^まま^ま
よ^めり

ま^まち^りら^らの^まま^まと^てよ^まけ^る

○サ^テモ^クア^ツタ^ラま^ま 此ヤ^ウニ^キラ^ス風^メガ^還留^シテ^居

ル^トヨ^クハ^タレ^バ知^テ居^ルモ^シガ^アラ^ウ 誰^ガ知^テ居^ルガ

オ^レニ^教テ^クレ^イソ^コへ^行テ^ゾン^ズニ^恨ミ^ライ^ハウ

ら^まん^のん^まく^梅の^まま^まと^てよ^まけ^る

上^トあ^るて^よの^中
と^のう^なれ^とま

をすこしうきうきの
こはは神のまを
こは神のうきか
んととまはれど
特世すすのうき
はあぐでお山を
子のうれむと云
かぐぐ

いざう我もちりあんヒトまうりあるばんヒトまうきめえん
○此やウニ桜ノ早ウ美テシウハアヨイ料簡チヤドレ
ヤ桜ヨオレモイツシヨニヌテトウナリ氏ナウテシマハ
人トモモノモ一サカリ盛リナ時カアツテソガキテオ
トロハナラズ老ホレテシシモナイヤウスラ人ニ見ラレ
デアラウホトニ
あひあれいなる人のまうでまきくうりまうきめえん
よまてあまきくうりまうきめえん
はる田まき

ちがちあんハ
ちれくちん子
あぐ今ちんま
中ちれんま
くちん

このうきうきの
はは神のまを
こは神のうきか
んととまはれど
特世すすのうき
はあぐでお山を
子のうれむと云
かぐぐ

一可也一君もやうきと桜もあはまうきとそでせぬあちうん
○此間チヨットキテ見テイナシヤウタ人が又ギルカト今
日一日ハマア待テミテソレテゴサラスハチルチラチツタガ
ヨイ桜花ヨ大カタ今日ハゴホリサウナモノチヤ
山のまうきくうりまうきめえん
まうきあふくけん桜もあはまうきとそでせぬあちうん
○霞ハナセニ此ヤウニ桜花ヲカクスヤラフルリトニルフハチラス
氏セメテハ枝カラチルアヒタナリ氏ア見ヤウモノラソ
るダサハ霞デ見ラレヌ

この下子典作因
季朝臣と云々興
傳は口伝されば此
下子書云々云々
必しつある事あり
かへは女もく志
る事候し

こちこそ形ひくもづみなる所子風ふあは
しくありしあはくのとゆるりあひびくを
搦のちりぐさあれりける事入てよめる

後承よるの朝臣

たれあてまの初へもあはれまの御もくつろひまの
○ワシニアハイガウルウテ 帳ノ帷ヲオロシテヒツコモツテハカリ
居テ春モイカヤラ日ノ遍テイノモシラヌニ笑タラ
見ヤウトあフテセツカタ待タ振モハヤコノヤウニウツロ
ウテシマウタワイノ

ミカ
みほのどくあが
る事あり

東宮の雅院^{ガヤン}あはくさくはる乃くあは水子ち
まてあはれなるをんくよめる

すがはる世

枝よりもあはくさくあはれはるもあはれはる
○水ノ上ヘチツテ流レ桜葉ガアトツト沫ヤウ見エル枝
カフモモロウ美タ花チヤニヨツテ下ヘ落テモ又同クア
ヤウニモロイ水沫ニナレチヤウ
搦のちりあはるをよめる

つらき

万葉子 殊 離者
思ふ心 ちとちと
よむべき 証之

とあふばさるばるやあふぬ 桜をみる 春さき入るまづらん子
○トモ此ヤウニ早ウキルクラ井ナラバ一向ニレヨテカラサカ
ヌガヨイニナゼニサカズニ井ヌゾ桜花ハ此ヤウニ早ウキ
テ見テ居ルコトナデガ心ガサウクトレテオチツカヌ
お安トあふばの説いとおどろく此行ハつれもあ
詩の意を以て思ふべきも 傍を考つて余もさく味ふ
ア
桜のあふくちとりのまねと人のあふまよ
め

吹あふハ吹合も
あり

ひささくと天雨
月とやとそくし鬼
辞と天のそくま
ろてつろあを
鉦の内はまうか
あきますなとそ
形天とあふ
らんとあふ

桜をみるちとりのまねと人のあふまよ
○オレ桜花ハ早ウキルモノヤ臣忍ハレヌソレヨリハ人
心ガサアチチキヤナセ上ニ桜ハタ風ガフカ子バ
タニチリモセヌガ人心ハ風ラクニテモマタズニ早ウウ
ル物チヤウサテ 餘村下句の程うさく
さくら桜のちとりのまね
まの友のり
ひささくと天雨のまねと人のあふまよ
○月光ハドカナ元リトニタキノ目チヤニドウニテ

久々のひらりのひら
 とききまの目まふ
 空のひらりよま
 んがごとく
 成るまじりひらひら
 うこのひらひら老若
 善悪ありま日朝枝
 のまじりまじりま
 まじりやうまお
 や
 ちかひの侍とちか
 舎人まじりま
 せし時々のまじり
 へまじり武士の集
 るまじりま
 が集るまじりま
 とのまじりま
 て集るまじりま

子てハチカとのひ
 院子てハハ面とま
 じりまド武ま

春風ハ花ハ咲テア
 たりラバヨケテフク
 モシ風ハフカイテ

春風ハ花ハ咲テア
 たりラバヨケテフク
 モシ風ハフカイテ

春風ハ花ハ咲テア
 たりラバヨケテフク
 モシ風ハフカイテ

春風ハ花ハ咲テア
 たりラバヨケテフク
 モシ風ハフカイテ

春風ハ花ハ咲テア
 たりラバヨケテフク
 モシ風ハフカイテ

春風ハ花ハ咲テア
 たりラバヨケテフク
 モシ風ハフカイテ

春風ハ花ハ咲テア
 たりラバヨケテフク
 モシ風ハフカイテ

春風ハ花ハ咲テア
 たりラバヨケテフク
 モシ風ハフカイテ

春風ハ花ハ咲テア
 たりラバヨケテフク
 モシ風ハフカイテ

ルニダコ上ヘドリヤウニ
 4レト云フデ風ハフク
 フヤラ
 ひそ子のあつらう
 うううううううう
 うううううううう
 うううううううう

山言ミ見つゝフク
 楊花風をんま
 ふうふうふうふう

〇アノ桜ノアヲ行テ
 見テ折タカッ
 タケル山ガ
 上ニ

〇ホライテ 残念ナ
 ガラオレヨ
 シ見テ来タ
 風ハ

ノ桜ラ心マカセニ
 スルデアラウ
 トスル 餘
 持山言の
 説

大友とらぬ

春風のふくは
 桜をちるふ
 うううううう
 うううううう

ちるるは浪ちり
らりともちる
小浪のめり
とこそあまも
失せる物のき
のりてあるとふ
り

○桜ノ千九ヲ惜メヌ人ハナケレバ 此ヤウニ此セツ春雨ノ凡ノ

世間ノ人ノ桜ヲヲレニテ泣クナミダカイ

其子院まかのうた つつめき

梅葉ありぬる風のおどろきあ形きま子浪ぞまけふ

○桜ノ千九并ニ風ガ吹タテ其花ガレバラク中テサウグクキ

ハテ下浪ノタツケキヤツシテ海ヘチゴリトミカア其

ナリハ浪ガタツガヤカオラテチラツテ此風ノアトノゴリニハ

水ケリ尺セ又空ニ井浪ガタツタワイ

あとのこころに此流あり

桓武天皇の延中
子山城のを思ふ
と遷され
御心苦しむ
まふしむを
まふしむを
のこ思ふいふ
あふしむ

かきとありふ 如くの都もろをハハル
○スレイ昔都ニカテシラタ 紫奈良ノ京ニモヤツハリ色昔

ニカハラズ都テアツタ時トホリニ花并イタワイ

事のうこころにありし ありぬのせぬさだ

花の色をまふしむありし見せぬをまふしむの山風

○花ノ色ス霞中ニミステオイテ見セズ尺セメテソウ香

ナリトモ霞中カラヌスミダテキテコトモハセイ

春ノアノ山ノ風ヨコヤ

寛平の山風さきの宮にまかのうた

寛平の山風さきの宮にまかのうた

妻性法師

花子のつくしやう
こころあはれひま
がゆりう

あのもちのまは初うあどまをまぶらうふをふ人あひなり

○花の咲く木モモウ今カラハホツテ来テウエマイモニナ

レバをがサイテ早ウウツロウ色ヲ見ナラウテ人ノ心モウ

ツロヒヤスウセルロイ

歌あらず

よこへんげ

妻の色はあつひのくぬ里ハわがく咲る咲る春のよめん

○春ノ色ハドコモカモヒラマイナバイキワタタ里トイキ

ワタラヌ里トワケハテハアルトイド云フテ春ノ咲タ所

上下のあひつ
でまねねのうて
下より入るうさ
あ

トサカヌ所トガアルコヤラ

妻の色とくよめり つつめた

三輪山をあらもかくすう妻あつ人よあつれぬあや咲るん

○サテク三輪山ハキツウ霞ダフカチ コヤウニアアカタラ

陰スハ此山ハ人ニシラサヌナイヨウノ花ガアルカニヌ

うめんあんのこはれとくは花又よまきこ山のあ

さうよあうれうなる時よあ

そせい

いざなるあまの山へああどりあんたれまはたけの茶花咲る

万葉集ノ三輪山を
あらうりすうさま
おもんあつらんく
さうべーやとらよ
のニの女そのま
お聞ひくやとあ
とくくうくよめり

うめんあんよ自筆
のむさしまつよめ

すかし子あめが
とーなまんのこく
ろさあてまあま

○ドレヤケフハ日ノクヒニテモ 此春ノ山ハカケクア丸イテアソ

ウダ 日ガケタテモ 花ノ陰ガササウナカイ イクラモ

花ノカゲガアバ モレ暮タナラ サイヒギヤ花ノカゲニト

ラウソヤ あげハハキマセバ 何げとおやくいあゆむ

おあまげの尻ヨクー しましれどあまう子をす

春のうつくしくあめ

りまでう舞ぶよん乃あふれむさーちんハ子申もあゆむ

○花ガチラスハ イツマデア舞邊ニ心ガウカヒテ居ルデアラウ

モレ冬ガチラスニアタラバ 千年ヲモ此野デタテウヤウニ

よハレル

歌しらべ

よこ人あそび

あまのこあめ
あまのこあめ

まどとふあめさうらハありあめと逢えんとハ命ありなり

○花ハ今年チツテモ 又来年カラ後モ 春ゴトニ盛ニアラウ

ケレソ盛リニ逢テ見ルコトハコチノ命次チヤワイナホ

急ガカリガ毎年アウテモ 命ガナケヤ 又ト見ルコトハナ

ラヌサウホハア残りオホイ花ガヤ

急のど世の活ねあふさうてー昔ハヌもうつり手あめ

○花ハチツテシウテモ 又春ニナレバ 年々お替ラズ 定

こしてハ
あめとあめ
アあり

多量集巻六帖又
八巻附信子一本を
一枚と見せしむ

一本子枝をあらせ
らゆともあつたれ
あつてもあつた

テ咲く物ぢやが世中が花トありニ定ムツカシク又物
ナズスコレテキタ昔モ又フタビカヘツテクルデアラウヤ
世中ハ色々昔ガフタビカヘル上ムフハナイ

吹風ふあつらはつらはあふ此中ハよきはとつとぬ

○吹テクル風ニ頼シテイヒツケフル物ナラ 此花一本ハ

ヨケテ吹テクレトイハウニサウイフフハナラモノナレヤド

ウモ散テモセウツガナイ

待人もこぬれぬあきは乃あきははるをはまては

○此花ヲ詠ヒテ折テ生テオイト 来々ナラバ見セウト志

ウテ待ツ人モ来モセヌニア、鶯イオモシロウウテ井タアツ

タラ花枝ヲオレ折タワイ サテモヲレイフヲシタコトカナ

待ツ人が来ヌクラ井ナラ 折ラ子ハヨカツタニ

こぬれぬあきハ来モセキさるふといふとあり。

咲葉ハ子は握りあつらはあつたれど誰もハ来ををはるををはるを

○ヨニ春サタスハイウケアルカ何の花トモ皆アダナ物ナレド

ソレテモ誰ガ来ヌハアダナト云テ ト下見カキツ者

ガアルゾ アダチモノヂヤト誰モイヒツ咲ケバ又ヤツハ

リ賞翫スルヂヤ 餘村好の詠をよみし。

あまがさきハ
りきみのよひ
流木の香あふ
よりの子ぐさ云

たきびく山はらの
の雲よりついで
ついであり

新撰万葉下子この
たきびく山はらの
用其類雑風を
主とあるをあら
とていふまじく
あり

たきびくの山はらの
の雲よりついで
ついであり

春霞の色の花は子とついでたきびく山の雲はけりも

○霞の色がイロに見えんハソ霞ノ冬はイテアル中ナ山

ノ花ノイロガ霞ヘウツクカイン

在来エカ

のたきびく山の山はまきれど吹まら風をそり香がする

○霞ノミツテアル春ノコロ山ハ遠ウニエルケルカクベツ遠ウ

モナイカミテ 吹テ丸風ノ花ノホヒガキスル

この山はたきびく山はまきれど吹まら風をそり香がする

うつろつとあそびてあそび

たきびく

たきびく山はらの雲よりついでついであり

○ウツロウタ花ヲ見レバアヲシヤトメウ心ガ花ニシココシテ

コチノ心ニデガサ 花ノ色ニウツタロイ 此ヤウニ花ノ色ニウツ

ツタ心ヲトウツ顔イロニダスマイ人ガ知ラウモシレスホト

二人ガ知テハアツリアウラニイフガヤ

お雲よあそびてあそび

歌あそび

よみ人らび

うづひすの山はらにどふまて見ればたきびく山はまきれど吹まら風をそり香がする

うひすもあふの
よまきうへん
はー

○鶯ノナク野へ来て見レドコノ野モノーウロウ花ラ

風が吹テ千スワイ 鶯が惜レガツテナクハダウリヤヤ

千林云ニの白のどろふねのりへくけて
なびー事くまきバハくろざまあり。

吹風とまきそくこよ鶯はれやいさすふふれき

○鶯がオガチカク来て恨メサウニ鳴クガソキ花年

ルが惜ウテウラミルナラア吹テ丸風ヲ恨ンデナサオレ

ガア花ニ白ツトナリごふ手トモフレタナラソオレヲ恨ミ

ヤウケレ オレ手モフレハセヌゾヨスレヤコチが知タレテナ

イワサテ

チイタキチイ
曲信信子新信

鶯をよの泣やとあま物あくがら小鶯子おさうあやえ

○鶯ニユク花が惜デ泣デチラスニ上ルモノオラコトモ鶯

ニオトロウカイ 鶯ニオラヌホト泣ウケレトナボ泣テモ花

ハドモトミラヌロー

仁おの中抱れふすん所の家子あ合々むて

志んるこ乳子まこける 鶯系海陸

鶯のちろとやよびーまき事あくろこれ山乃うひの巖

○鶯ヲタツテアルアノ立田山ニ鶯ノ声ガスルガ花ノ年ニコ

今の本子後彦と
あつてさう下子
後系ののちふげら
うゝあひひひと
假名まてうらふ六助
この人あさう

花の初めは雪の
とわがはやくは雪の
のすゝめは雪の
花の初めは雪の
とわがはやくは雪の
のすゝめは雪の

トガワラウ名ハレテアノヤウニ鳴クカイ

うひすのおきとよめら

そせい

づゝんおのがお風もあるをせとれはおせとら鳴ん

○ 鶯ガイヤウニ花ノ枝ヲアキスヘコツタヘバ自分ヲ

ケラチノ風テモハルモノヲソレヲ誰ガ答ニシテア

ヤウニ恨スレサウニ そらレキリニ鳴クコトヤラ 外カチラスカ

ナヅクヤウニヤ 手秋ニアハ拍の敷の多きとあれバ

鶯ガイヤウニ花ノ枝ヲアキスヘコツタヘバ自分ヲ
ケラチノ風テモハルモノヲソレヲ誰ガ答ニシテア
ヤウニ恨スレサウニ そらレキリニ鳴クコトヤラ 外カチラスカ
ナヅクヤウニヤ 手秋ニアハ拍の敷の多きとあれバ
鶯ガイヤウニ花ノ枝ヲアキスヘコツタヘバ自分ヲ

鶯のまじまじとあくとよめら

えらぬ

あつたまきまはりの子

○ 鶯ガイヤウニ花ノ枝ヲアキスヘコツタヘバ自分ヲ

ケラチノ風テモハルモノヲソレヲ誰ガ答ニシテア

ヤウニ恨スレサウニ そらレキリニ鳴クコトヤラ 外カチラスカ

鶯のまじまじとあくとよめら

○ 鶯ガイヤウニ花ノ枝ヲアキスヘコツタヘバ自分ヲ

ケラチノ風テモハルモノヲソレヲ誰ガ答ニシテア

ヤウニ恨スレサウニ そらレキリニ鳴クコトヤラ 外カチラスカ

あつたまきまはりの子
きんぎょのうしろ
くすのぼり
とら言子てみそ
とら言子てみそ
とら言子てみそ

の事の本に入る

あかあかさまの結
雨ちりまよふ雲の
ころもひやくこころ
それとあひあつて
お月さまの子をばら

ニカウゾ 世ツフル京ハサヤ 雪ノフルヤウニサ ヒタクト
花ハキルデアラウロイ

あつとをさおつ恨えん世の中子あつともさあつとあつと
○花チツテユラ 何レ恨えんコチが身もモイツテ
モ世ニカウニテアラウモノカイ 花ト内ジヤウニオツテ死
テユラモノダヤ 花ガカラ早ウチル上テ恨えやウヤウナイ

小辞小断

○エエ、花の色ハアモウウツロウテ なくウタロイナウ
なれ色いづつよりあつとづつ小我世もやあつとあつと

こゝろの事
中あつとあつと
子あつとあつと
子あつとあつと
まゝあつとあつと
まゝあつとあつと
まゝあつとあつと

「度モ見スヤ」ワレハツラフテ 居ル男ニツイテ 心草「カアツ
ラ何トヤヤクモナカッタア」ガニ長雨ガウタリナド
テツイ花ハアヤウニヤ

世の中ハ男女のあつとあつとあつとあつとあつとあつと
とせ世も世の中とあつとあつとあつとあつとあつとあつと
これとあつとあつとあつとあつとあつとあつとあつと
あつとあつとあつとあつとあつとあつとあつとあつと

仁知の中あつとあつとあつとあつとあつとあつとあつと
あつとあつとあつとあつとあつとあつとあつとあつと

まがの山越ハ今乃
来の春あまの山
のの地の方より
あててまがの
とえまがの
へがくまを
持まはまると
冠輝ハまがの

ととあふんハアヤもれをんあまどはぬきてまがの

○散テユク花ヲヨレイトあつ心バドウグ糸ニヨラ九 物ナラヨ

イニソレタラソノチルヌヲツクイツノ糸デツナイデナラ

ヌヤウニトメテオカウニ

テ女ノオホセイ来ルニユキアフタトキニ

まがの山ニえん子女のおやくあつらんまがの

つらけり

はらあま

あづさらんまがの山へとえんらんあまの山へあま

○一 春ノコロ山ヲ越テクバドウモ道モヨケラレヌボト

花ガチツテクルワイ アノ女等ガガ

寛平四附きまの宮のあまはら

まの山子あまつまんこつおとあまの山へあま

○此春野デ着来ヲマウトマラテ来タモノヲ アテラハ

コチラヘナリマカウヌデワカナヌム野ニテハ一キレテ

フミマヨウテソデモナイ野ニキヌワイヨヤ

山あままうてたりはら子あま

あま人のをく此野あま下の子ハよと寄一あま

あま

やどりあてまの山子ぬきおハあまのうちあまあま

まがの山越ハ今乃
来の春あまの山
のの地の方より
あててまがの
とえまがの
へがくまを
持まはまると
冠輝ハまがの

まがの山越ハ今乃
来の春あまの山
のの地の方より
あててまがの
とえまがの
へがくまを
持まはまると
冠輝ハまがの

るうきさるうき
のあふれは山も
もよほしはるうき
多くてこまやま
のうきあはれ

遍照花山より
時

○春花ノ千九時分ニ山ニ上ツテ寐タ夜ハソノ花ヲ惜シク
ト名フユエカ 夢ノうちニモサるキル下ツカリタミルワイ
竟平山時きさいの宮乃あまの宮

山風と谷のあまの宮よりせし山々れのふせとすまや

○フキチラス風ト流レテユク谷川ノ水トカナイモノナラバ
ミ山オクニカクレテ咲テアル花ヲ見ヤウモノカイ見ニ
レスマイニスレヤ風ヤ川ノ水モ花ヲタメニメツタニワルイ
フガカリデモナイモノガヤ

志賀よりくるる女どもの登山のついでに

あの下をまわつてつらつらとよまをておくりらる

傍心遍照

よまふくそてくるん人よむのふをひおつれよ枝はをる

○カキツトエヨツタバカリテ足モぬメズニヨソニ見テイヌル人

ニハヒツウチイナスナ藤ノ花ヨタトヒ枝ハ折レルトモトウ

ツハヒツウチトメヨ

かか子後の葉さうらりらるせ人れまをちん

えらるとよあつ 三時ね

かか子後の葉さうらりらるせ人れまをちん

あつれよらんま
やまよとあつら
傍心のロザマ

かか子後の葉さうらりらるせ人れまをちん

井ナラハ此方カ見ニミエルヤウニシテクレヤンレデハ咲タ
カガアツテロケノ名トモモカヤニ 高の音あり

よりの川北をより山吹の咲るなりとあり

ほろりゆき

吉野川ノ岸ナ山吹ヲ見ル風ガ吹テチルガヨ風デ川ノ

水ガウツクニヨツテ 底ヘウツクタ影ニデガチツクワイ

歌ニヨリ

歌ニヨリ

よき人しるが

井ノ山吹ちり子なるよの盡きありとの かせ

万葉集子橋のうき
天の川のそとそと
うきハあつとそとそと
のうきうきあつとそと

ゆめをこのちちと
山吹子とくうへの
こはれど古きあれ
あつとそとそと
あつとそとそと
あつとそとそと
あつとそとそと
あつとそとそと
あつとそとそと

○一コ井手ノ山吹ガハヤモウ葛テシニウタワイア残念ナフ

ヲシタニソト早ウ花ヲサカリノ時合ニ逢フヤウニテ見ヤ

ウデアツタモノ

このあゝある人のいもくたちをきれまよるがあえ

きれるとまよるあゝ

あゝまよるまの山へはあつとそとそとあつとそとあつとそとあつとそと

○ソシテフソクスイクトニテ定ニツタ旅デハヨソトニルハウイ

物ヲヤガサウイフ定ニツタ旅デハニハアアフタドウシ

春ノ山ヘツレタツテイテ一日トクレルニデアソシテイキガ

月の入ると弓と射
るさうねてまや
きんをやくめす
うまこの雉のころ
もつこの巧まゆり

リニトシテミタイモノガヤ ソレデオモシロイ旅寐デアラウ
おま。ト白のこころをうらむ。

来れどくろくとあるとある。ころね

梓弓たるまゝあり年月のつゞきとくもおもむけるうね

○古の二梓弓春トツケテヨシデアルガマコト二月早ウ多
テ矢ヲイルヤウニスル、春テツテカラニダナシニモナイニ
サテモ早ウタツタ丁カチ

そ一月とあるは、まゝと八年の昔れあふれはるる。
春の昔れあふれは、世付いりまきこむ。

やよひは常のてゑ久しう安えざりぬる。やよひ

つゆき

鳴くむらさきあはれは常もそて、おもうをあらぬつゝあり

○ナンボ惜シテ鳴アモく花ハミナ散テニウテ 鳴タフト

ル花ハナケバコレデセシナイフチヤト必ステ鶯モシニニハ
鳴トモナウナツタテアラウサウアリソチコニ急ハルソレデア
シウナカヌヤニテ 惟我ニあり

やよひれつゝありやよひ山とこえなるは山川より
のあづれぬる。ぬるやぶ

おろくハ何となく
身又もむらさきハ
おろくハ何となく
おろくハ何となく

おのころのまはるやう
さしこころのものの
よもぎかふと

此人のこころ始末をくみかねば、姓をあらぶべき例あるは、
姓をきまらぬが、又おのころのものがせむき不とせむはひ
かこあやま。

さしこころのまはるやうとあるは、山子かまをさすれうまなり
○花を流レル川スチノウチにカミノ方へヨネ子テ
キテミバ山ニモウ花ハミナチツテニウラヤ春モナイヤ
ウネツタワイ

まぎとてある ことか

さしこころのまはるやうとあるは、山子かまをさすれうまなり

春ヲ惜ムケレモウヨセントトリハセヌ 春ハモウタテイヌ
ル道へ旅ダチレタレトトラヌズチヤ

旅ごらの縁子つとむ。結ぶらむちぬまじむとつふ
さしこころのまはるやうとあるは、山子かまをさすれうまなり
つとむらむちぬまじむとつふ。結ぶらむちぬまじむとつふ
さしこころのまはるやうとあるは、山子かまをさすれうまなり

實業のち耐きまのの宮北の宮のうら

おまじ

春ヲ惜ムケレモウヨセントトリハセヌ 春ハモウタテイヌ
ル道へ旅ダチレタレトトラヌズチヤ

さしこころのまはるやう
さしこころのものの
よもぎかふと

得ては行はさるる
と書ゆゑもあ
るまじ

亭子院の女子まればそとのあ

又ら孫

ひふのこゝと書と心なとまきとふもたうとやすきとまの影けらハ
春ヲモウ今白バカリゲヤトハ必又時テサハ花ノ下ハ馬テ
イヌルノカ何シトモナイガサナツレテサハ花ノ下ハ馬テサリトモ
ナイニニシテケフキリノ春チヤモノ

頭書古今和集巻第廿二

頭書古今和歌集巻第廿三

夏歌

歌一〇〇

よき人志くす

や卯月の事
附そのいづく
と書ゆゑもあ
るまじ

歌中の池はあまの山肘をいつうきふらむ

○コナ庭ノ池ノ辺ナ花ガ咲タワイ 郭公ハイツ来テチ

クテエラフ

此のあつた人のいづくまのゆをれ人まらぶ

うづきふささる様と見ゆゑもあ

紀一〇〇

このあらはらう
らよん

附きハらう五月
子多ハ五月
とてこれハ月
子よん

あつたふととあやふやうにやまをあらけてひらきん

○今月ニテテ按系アルメツラレイフチヤコレハナデモ見ル

人がアハレ見ブナアハレ見事ナト云フ其詞ヲ方ノ按

ヘカテヤルイイ^コヒトリガサウイハレト云フテワガトモヨ

リ後ニオソウヒトリ笑タテアラウカ ○千秋云後白子ヨソ
とくつとてささるる

歌しらず

よんハらう

さ月まの山附をうらつたき今も雪おむこまのあつた

○郭公ハ五月ヲ待テ^イチヤガ^カマタ五月ニナラ子^氏去^年

ノ残りノ声ヲ出シテ^トウツ^合モナ^カカ^ニ ○千秋云フ
ちんあまハ

万葉集ハ羽振と云て羽とやると云
この詩子ハなまきと云うまきと云う

伊勢

五月ニハ^イチヤ^カマ^タ五月ニナラ子^氏去^年

○時鳥ハ五月ニチ^タナ^ラバモウ^次山^ニチ^ツテ^メツ^ラニ^ウチ^イ

デモアラウ^トウ^ツニ^ダソ^ノ時^帝ニ^ナラ^ヌウ^チノ^声ヲ^ウタ^タ

イモノチヤ

よんびと

さつき待を橋の香とらげば昔の人れ袖のうぐすまる

○五月ニク橋ノ花ノホヒラカゲハニカタノナビトノ人ノ袖ノ

たちが子も五月ふ
嘆きのあはれ五月
待つとソノこころ
が袖ふれし中
袖をもるごとく

く橋の香をう
まてはるるく
おつ人の人のそ
での香やあつと
あつとの白た
あつたつたつ
まをりつたつ
つたつたつた
らる人のゆ

香がサレ

ののまふ^{サツキ}青きみん^{サツキ}はりの山をきき今ぞあつ

○イツノニ五月ニツタヤラヒゴロニ待ツタ時鳥が今始
テサナクワレ

はさ紀子きいも^{タビ}橋あつ時鳥さあちつ子^{ヤド}あつたつ

○ヶサ始メテ来テ一^{スミ}ダ住ツカズニ旅カケテ居テ^{時鳥}
ヨ定メテ宿ヲトルデアラウガコナ^{橋ニ宿ヲバカレ}
カニソレタラ存分ニ^{ウニ}

おつとも山とこえらるる時子^{あつたつた}あつたつたのふくとあ

てあつ

紀友則

青羽山^{こえらるる}バ附香^{あつたつた}捕ち^{あつたつた}ふと^{あつたつた}あつたつた

○音羽山ヲヶサ越テ^バ時鳥がアハルカチ^{捕テ}アレ今

始メテサナクワ

音羽山とつたつた子^{あつたつた}あつたつたの声のこつたつた

ほつたつたのこつたつたあつたつたあつたつた

あつた

附香^{あつたつた}あつたつたあつたつたあつたつたあつたつた

○時鳥ノ始メテ^{あつたつた}あつたつたあつたつたあつたつた

東性集^{あつたつた}
あつたつたあつたつた
あつたつたあつたつた
あつたつたあつたつた
あつたつたあつたつた
あつたつたあつたつた

そのこと扶す
何ぞ

石上と云ふことあり
布留の社あり
幸まて古きこと
中雨のやうにい
そのうくやると云
うらむ

ナウカニシヤウガオコツテ無益ナ 其人ト云ニツタノモナイ
恋コナガスル すぐくも。ハ又あり。 此のありハ三の
句此類ナラウとして使へ。おのりろなまこと又のこえ

あゝのうそのうとちよして朝のふらとよめ

いそりくろしき郡の財をこまばうこそむく。おのりろなま

○此石上ノアタリハ昔ノ奈良郡ナリヤガ 今ハモウ何モカモ昔

トハ変ツテヒウタニ 郭公ノ声バカリガサカハラスニ昔トホ

リヤワイ 村書ある名上チハ山名郡石上トあり

奈良と云ふものハ今の奈良にて石上のおとらと云ふ

ひろく奈良といひあつた。たへハ今世子丹波の

西あり アタゴ 愛宕山を他國よりハ糸の愛宕といふ

あり。 お夢の流ひごと

歌一ハ

よき人ハ

夜山ナクもむきんあふおあつれよまうさきうせ

○アノ山テナク時鳥ヨムガアノヲラ 此ヤウニ物名ヒラシテ井ル

ワレニキカシテクシナ

わきまの啼声きけハ別あり 夜々さるる意ハあり

○ホトギスノナク声ヲキケバ 感懐ガオコツテ ハナシテキキハ

荆楚歳時記ニ杜
筋初傳先國者主
別離とのい客
中子多クよあり

より見ゆれと
の宿らひ萩城
原のまゝとつら
あつし時の物も
いひますのこ

うれが声のちち
も我の明るや
のよけ程まゝ

幕くつひあは
まぐとまき子
ささやうあらし
ていひあはハ
のあやま

あつしあつし
く付りしは
まのまゝとつ
あつしあつし
あつしあつし

○夜ルテクライヨツテド中人モイカヌカヌ道ニヨソタラカ
ホトギスガ野モ多イニコキノ庭デヅカリドウモ色テイナ
ヌヤウニゾツトウテ弁ル

ちんちん

やうとせしを構もうれあつしあつしあつしあつしあつしあつし

○宿カツテ居タ橋ヒダカレヒセヌニ時鳥ハナゼニヨソイニ声モ
セヌヤウニツタヤラ

まのほろ

及のおハあつしあつしあつしあつしあつしあつしあつしあつし

○子ルカトハ時鳥ノ声テハヤエウ明カニツタヤラ
知一後カチ上向スホトキスノイタ一声テ目カサメカ
ハヤエウ夜ガアケル

あつしあつしあつしあつしあつしあつしあつしあつし
あつしあつしあつしあつしあつしあつしあつしあつし
あつしあつしあつしあつしあつしあつしあつしあつし

まのほろ

○日カクルカトハヤアケ此及夜ラアツリ短キニ

すうきんちん
ても此外あり
まゝあり

新撰万葉集
のたすく夏
舞の年報
舞の年報
舞の年報

リまうんフテ 郭公アヤウニナクカヤ

紀州歌

及山子急しき人ヤ子及ん急しきてきくや

○ア山へ時鳥ノ急しき人カコモツカレラヌソナヤヤラ

声ヲアゲテトク 録材ヨリク ちんちん

歌一しん

まことあはれ

こゝろ及急しきてし時鳥をれあはれまのやを

○去年ノ夏文各ニタエドイテヨウヌ知ラ居リ時鳥

ガ今又一クアハ去年ノイタノ時鳥ガカウテハナイカ

声ガオナジレチヤガ

時鳥のきくせまきくよめ

ついで

五月の夜もさうし時鳥あしきうしきあはれ

○時鳥ガ五月雨ノ空エドド、ヨロトヨロタスラ時鳥カ何丁

ヲウイト心フテアノヤウニナクヤラ

さあひあしきとのこたのしけいんあはれ

時鳥あつちよあしきあはれ

みはね

さうハキもさう
と時鳥のうしき
とこれと時鳥
よあはれ
あはれ
てねとひき
とさあひあしき
らさあひあしき
あ

人まら山を名取と
云ふもろくたがね
のせまら山子人まら
とのひろけりか

肘高るもとまらえん山びとわ初りよ味あきとく人かせぬ

○時鳥かたかくトニテ声モまエヌカヨソテ鳴く声ナ

リ氏コハビイテまエバヨイニ山彦ハナゼニコハヒカサヌイ

し子布をギ及の鳴らるをまらとくよめら

清くゆき

肘高る人まら山子さく形れハ家うちつけふまらまらりら

○人が来モセウガト待テ居ハ此山ニアヤウニ時鳥カ

ナク今テサボトモめ分シガカニカニコ平モ人ヲ待ツ心

ガハツタロー

たまやくすくろくろくこまのすてわとくぎ及のふき

らとをまてよめらるゝあがこね

けり六方よるま
わくしあへれり
れまはし且はへ
濁りていひがま
おんえのよるこ
やうこ

○時鳥ヨシキモオトトトシヤウニ昔カ今デモ恋シイカ野

多イニ本ト在野へまテ来ラハ昔カ恋シイヤラ。今もハ

あれもくあま
わくくまわ

肘高るの鳴らるをまらとくよめら

こつね

わくまら家とハ子ふ初のまのうまよれ中子味あきとく

我と子一子とこ
れかこ子一子と
るハこ子一子と

らやよつろてん
らや
らやの冠舞子附
のりれと用て高
れりあかすり

法花経の涌出品
の文字不潔世間法
蓮花在氷これと
ゆてあり
白氏文集子荷
露難而き量珠

○世中ラウイ物なフテ泣テクラスモノハオビカカ時鳥ハ
其オレハナレニドウイフコテ世中カウイトユテ卵ノ
意ノアタリハキテアヤウオレト曰レヤウニ鳴テラス
蓮の香とよてある傍正遍照

はちば葉の宿るふきぬんりてありまふととあざむ
○蓮ハ世中ノ濁リニソマヌ舞言へニ経ニトイテアルガサウ
云フ法淨ナシテナゼニアヤウニ葉ノ香ヲモトクセテ
人ヌバダニスコトゾイ
月のかりくろくろくよあつつきこころよあ

少くや姫

夏の扱はまがく青あざむ月をうとをのづこり月せとらん
○アヨイ月テアツタニ夜短イコハニタヨヒニミテ

フケル間モナレニヤツタモク夜短サデ八月ハ西ノ方ノ
山ニテイキツク間ハアルニイガアノ曉ノ雲ノ上ヲラニトツタ
コヤラ

隣より床返の意をこひもをそりらば傍で
とよこせつらり
足はね

床はまのねはち
つゆると友病す

春とよ子す急いそふ嘆より妹とらぬ床あつめ

うまはぎらふのち
とまじふふんま
ふりぢとをす
あまのこころ

初ふハハキスア
万葉子桂及とら
ク

○手前トトツハカトワガテ寐ス床ナクテ 大事ナデ并

ルモガサイテカラ 唐弄ハカケイトサ存スルホト大ナクテ

并ル折テハエレニジススイ。千枚云云前上句三二二と
句をオオクして見ざる

ニ子月の初ゴのり此日よあ

夏と秋と初ふ空の通ひぢか入涼キ風ややくらん

○今晚クレテユク夜ト来ル秋とイキチガク空と通り道ハ

ソノ夏ノ通ツテユク斤一方ハ夕暮ウテ 秋トホツテクル

斤一方ハスレイ風がフクデアラウカイ

頭書古今和歌集巻三終

頭書古今和歌集巻三終 卷第四

秋弄上

秋のり日よあ 後意敏初朝臣

あまのこころと目ふハサヤウ小足ハぬき風の音もぞおとれぬる

○秋がキタトイフテソレトハツキリト目ニ見イヌケレドケラハ風

ノ音ガニカニカツタテサコハ秋がキタトヒツクリシタ

秋弄上人のよめももの川原に川せうをう

しるるもふあうりてよあ

はる西ま

あまのこころと目ふハサヤウ小足ハぬき風の音もぞおとれぬる
くハハキスア
万葉子桂及とら
ク

河風のすゝもあまらむおもひを眼とまよふ秋のささげ

○川風ガサテモア涼イナカナ浪モ立ツト云ニ秋ノ来ルノモ
立ツトイハ此岸ヘウチヨセル浪トイツリヨニ秋ガタツタカ
シラヌ

歌一巻 ひとりあはれ

こゝろあはれーまはれの
さう風とあはれ
上ハ春ふよあはれ

コトセキ衣のすそを吹くしうめづしき秋の初風
○上コトくくさうレイ秋風チヤサテモ涼レイコロヨイ
解持子バガセコハ女をささけりといふはひさしきいふこと
ありこまハ女乃前あはれー又音林良持をゆき引

まきまきふはらうれもごととあり新古今集有あはつ
引いぢたよ抱えんささきもささきもささきもささきもささきも
風を吹くくねふよれははらうれもごととありあはれ有
ーあはれー

きよのよまひさるあはれーうりのま小指さるよまきて秋風の吹
○一ダ昨日コノ田ヲウタレソレミアイツムニ此ヤウニ稲葉が
ソウトレテ秋風吹マウニオタツゾ

秋風の吹く日より久々の天の川も小たぬ日つねー
○コレハ秋風吹ソメタ日カラ毎日く此ヤウニウ天川ハ川系

あはれーまはれの
さう風とあはれ
上ハ春ふよあはれ
こゝろあはれーまはれの
さう風とあはれ
上ハ春ふよあはれ

ついでにこのうらま
今の橋のことあり
そのはちとりのやりの
はあうりしとこあり

たまふつめ、
あま織女のニ
とよむてし
横のりく、
助

へ出立立テ君ヲ夕夕日一日モナイ

めろく、
こ乃教多し

。千秋云このあまの
まりつめふあくとよ

久々の天の川を此返しもあまのうらまのちがくしてよ

天の川渡し守ヨ君がコチ入に渡リササ夕夕ラ子キニツノ

船ノ棹ヲレレ又ヤウニカウレテオイトクレーソシタラ川渡

ツテカカリ弁ル下カナルマイニヨシタイツデモコチニ渡

苗テアラウニ

天の川もちと橋小後まをたふつめ^の林と^もま

○天の川橋ニ紅葉ヲ渡スユエカレテ時節モま^の一 柳枝

サガ 秋ヲ此指サレ

あひくで逢秋ハこよみ天の川をカまわう^の 柳もあまの

○二年、アヒタ長月日ヲ恋クテ 夕夕度星下柳

枝ト此逢サカル夜ハヨヒキヤドウガ天の川へ君ガ一カニ立ッ

テ^ミ 園ウツテ イシテモ 夜ガアケ子ガヨイ

夜草の取射をぬうのようへはささあうぬとのことよ

あまをれと仰せぬる時ふりつりしよあま

とよのり

あまの川は康あま皮たごうのうらまをねがひがあまの

あま康あま皮の
あまの川は康あま皮の
あまの川は康あま皮の
あまの川は康あま皮の

まじぬまじくまじぬ
こゝろこゝろこゝろこゝろ
てがねははらへる
まじぬまじぬまじぬ

○此天川浅瀬舟ヲシラス故ニオボツカテ水チカラテ

チヤコチヤトシテヒドシクニ又渡ツテトイモセヌウチニ

ハヤ夜カアチタロイ 千林云、世の舟楫ハ
ハヤ夜のそとあり

日向船まをいの宮のまを合れあ

おちづのたまを

葵のらんがつらき棚棧の身小のまをあをあを

○一年ニタツタ一度ヅト約束シテオイタ棚棧ノ心ガキマ

一年ニタツタ一度ヅラ并アウガアウカツヤ達上モノダハ
七の日のおよめ 九河の躬恒

年とよあどハすれど棚棧のぬらねれぬぞす うららる

○棚棧ハ毎年達ツルハスレバ一年ニタツタ一度ヅラ達

シヤル夜寂サスチイアガヤロイ

棚棧のつらまのおもて年のと長くこのやうに

○タナバタ祭リヨヒ手向テオ借レシタ糸ノヤウニ長ウ引ノ

テコヒカラム年久レウ此ヤウニ思レウ思ラテ月日ヲタニル

トデアラウガ 是ハヒタタマあるおのが念れあ

影しづめ ませぬ

よひこむ人よあわだたまがの久き程おれをさすれ

今夜手向らゆれ
と長くとらゆれ
よりのとらゆれ
まよふとらゆれ
一人のともか
るま まま
まこらゆれ
まや織女おのて
新巻織屋記
まよふとらゆれ
まよふとらゆれ
まよふとらゆれ
まよふとらゆれ

よきぐりてしま
めらひまかよも
名をぬすりまの
身の流すもの
まひくくすま
命のきぐりす
るとうあがぬく年
も終す候くま
て猪くす何とま
るもや猪あぐ

○今夜え入ニアウマイ 今夜ハセカヤニヨツテ 棚撥ノ久
シ一年ノ間ヲ待ツノミアヤカツテ 子モ久シウ待ツヤウナ中
ニテ一モアラウホトニ

七人の板北味子ある 深むねやキ北相長

くふいさく、ワラウ、ワラウ、天の川海をぬさきふ神がひぢぬる

○サアモウトエテ 別レトキニハ 天川ヲ渡リモセヌサキニ
此ヤウニ袖ガヒツタリト涙テサヌシタ

やううの日ある くのたぐみぬ

ふふふふふふふふのぬりもぐりくふふふ 結後ふふふ

○夕太夕太、サ 今日カラシタ 又今カラ来年ノ七月七日昨
日ヲサイカケトヒタスラ待テ月日ヲタテサシヤルデアラウ
ト云ハル

野一らぐ ちまへしす

このまじりのくす月の影をぬらん候やの杖をまじらん

○木ノ枝向カラモツテ元月ノ影ヲミテ 廣シ見ルトハチガウテ
スシシホカ見エテバ 甘クシキナ物ヤ 是ラミト 今カ
ラ總体モゴトシキナ杖ガキタライ

大くこの杖をうらふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ

大く六九十五
ちまへしす
ちまへしす
ちまへしす

そこのお二つと
さうおしてやまをま
つりかへておまをま
つりかへておまをま
つりかへておまをま
つりかへておまをま

詩は秋風を相ま
人海に秋風を相ま
先聞

○世間一日秋がキカラシテ人ハコノヤウニナイサウナニオヒト
リガサ秋カオシイ物ガヤトモヒシ多秋オシ独ノ秋デハ
ナク世間一日ノ秋チヤニ

秋アホクハ秋ウモあまきくハ虫のねまのまあがぢぢ
○オシ悲シクもサウタスオスル秋デモナイニ虫声ヲキク人
ヨリサキヘハ二番ガケサオシカナシ

秋トハ秋ぞきききゆめづつとつらみやくと限^本と知^本ハ
○草木タツク色ガオツテ表テイコノ草木トシテイコノ
ヤガオツテサウ物トシテイコノ時節ハハシガヤトモハ總

秋ノ物ナミツテモ秋ハ悲シクも聞よる一秋持
コノ

ひのあまのこもさきさきあふねども秋なるよみいふあはれり
○草ノ葉ヨリ秋ハ表テヌルモノナレハワカヒトリ子ハ床ハ

コサノ葉デハナケレバ秋ニナレハ夜ルハハヤウニ涙テ表
ノヤウニヌルワイ

あまのここのみとれ秋のあまのこ

○イツハ物ハハトキヤトモ時節ノ差別ハナニイッテモ

よむとハ初文と
ひ又ハ初の方
よむとハ初の方
よむとハ初の方

よむとハ初の方
よむとハ初の方
よむとハ初の方
よむとハ初の方

とむありのつむや
言中と全男の中子
秘伝芳名と云有
それと神々の壺
とらふ

物名とアノケレトクウチモ秋ノ夜ガサ イツチ物名
ヒル頂上ガヤワイ

かむありは法不子人ともつまうて秋の夜
とむむまきとらふのどとよあはる

この杯

はちハハ杯の内あり。秘伝後遺書がどのふくろの
此杯の内はあつた子とてそつを金に黒名
したるおむかむれうのつむや。雷の落しとことあ
まうよう。吳名子なれとく。壺と名。言中。術請之

壺とあつたこれと器の壺とも別ありあつたこれ
うま

くづりともあつたとつづらまおてあつた人

○コレボト面白く。ツタラ秋ノ月夜ヲ 寐テラウテ
リト明ス人モアラウカサウレタ人ニテカサ キコエヌ子ヤ
心レレ 待杖つづらの流しあーいづら子物
秘ていづらあつたる

影くらげ ちこ人あつた

白やしらねあつた。いづら此おさ入あつた林のこれ

とむありのつむや
言中と全男の中子
秘伝芳名と云有
それと神々の壺
とらふ

歌風車子影くらげ
やうとあり影くらげ

多ふも新さとお
すゝ左の訪り秋
天飛翔雁秋見
あり

白氏文集子集
子樓中霜月夜秋

兼准為一人長とあ
ると千里の傍を
此ハ其のひりり
よめりよ

今の幸も秋さ
とむねに古事
あまの集り秋
くあを利
あまの秋ハ
へはるの秋
まことの目
てつる其
用おのり
の秋ハ
ひく

○サテヒヤカナ月カナ 雲へトホト言イソラヲ

ツテトニテユ雁ノ救ニテガヨウ見え

つもつふりし雁ノ雁ノおとあふんて飛こるを
さうあまの重さうあまの重さあまの重さ

さよ津さ秋ハひりりし雁ノ雁ノおとあふんて飛こるを

○夜ハイカウツケタモウトト夜半ニツタサウチ 見ハ雁

啼声ノ安ユスツソラノ夜モウ月ガハツタ

長夜ニツノ秋ハあまの重さあまの重さ

大の千里

月ハ此ハあまの重さあまの重さあまの重さあまの重さ

月ヲ見ハオホイロト物ガキ 悲シイワイオレヒトリノ
秋ハナケド

長夜

久々の月此も秋ハあまの重さあまの重さあまの重さ

○月中ノ桂ハアまの重さあまの重さあまの重さ

ナド云フハアリツモトイモウチヤニツモヤツハリ 秋ハ

スルカレテイツモヨリハ光リガテリハツタ 紅葉ハ

ツテハヤツニ照リハサレテアラウ 秋ハ

月とあまの

在来ニエカ

くぶ山とそと
まじらふまじらふ
まじらふまじらふ
まじらふまじらふ

この世のまじらふ
まじらふまじらふ
まじらふまじらふ
まじらふまじらふ
まじらふまじらふ

秋の夜は月の光ありあけはるる山も越えつゝあり

○此やう月光ハ秋の夜ハナボ間イクラフ山テモ

ラレウトハハレト

人のゆゑにありける秋まじらふのあきくさき

まじらふまじらふ

まじらふまじらふまじらふまじらふ

○コレも真まじらふ心苦かオホウテイロノラモフテ

夜ハ長イヲ別レカ子ルイハハルガハ真まヤキツクス

し白ハヤウニエリ泣ハルナイ心苦カ多ウテ秋の夜ハ長

イガメイノオチハキ振リ扱者サホノ下ガワイ

維材オアサカハシ

身負いこの秋はあ合のうら

やまきの朝長

秋の夜は月の光ありあけはるる山も越えつゝあり

○オモイ秋の夜ハアケルモトニテノモテハオチガヤウ

ニテモ物が悲ニイカシラヌ

秋ハナシ

秋の夜は月の光ありあけはるる山も越えつゝあり

この世のまじらふ
まじらふまじらふ
まじらふまじらふ

こがしとんちんちん
とまをばいとお
おのこらとを
さうとあり

あつあつとんちん
たまあり

○ 萩葉毛色いテソウ枯カテクル時節ニツタミ
物がナレウテ夜ルモ子ラレヌニアノ暮モ月レウニ夜ル
スハツチセオレガヤウニ物ガカナレイカ

○ クサムラゴトニアムウ重カ難美カテ鳴クヲキババ秋
夜ハ暮ガカカクベツニ寒イサウナ

○ 人が見ステヨリツカイテドコモカモキツウアレテ軒ナトハ
ハレフカエテ見苦レウ方テ其入ヲ恋レタラテ居家テ

ハ庭テナク松虫ノ声ガサ人ヲ待ト云名ユエカ一入カナレウウエ
ルワイホウヤツツウの注ル

○ 此秋ノ野テモウ目モクレニ及ブ道モフミヨウタホトニア
人ヲ待ト云名ノ松虫ノ声ノスル方ヘイテ宿ヲカツタモノテ
アラウカイ

○ 此秋ノ野ニアレシラツト云名ノ松虫ノコエガスルワツヤ
レヲツカトステドレヤ行テオミヒヤサウ

註ル

あきの野ノ人モウ虫ノコエスアリ秋ノ時ノ行テいざとあふ

目ぐくく木のえ
どめあり鳴小は
あり口とまきあ
胸すくあま日
ぐくくとあひ
つん

とちあまのあて^{ツモレ}あまのあてとあの中こらあ

○モミガなあテツモツテ 誰モツミ分テ来々人モナイヨナノ

庭テタラ持トテアノヤウニ松虫をキリニ鳴コトヤラタ

モ来ルハアアアニ おまあうろく一様持日ろく

ひぐくくのあろくあま日くれぬとあふ山の陰あを有る

○ヒグラミガ鳴イタツレテ目くらタトセツタハサガテハナカツ

タ山カケデサ 闇ノテアツタツ 千枚云あまのあま
あまこれとつれとま

とつあまこま子あつ らあま子あまこつね子云く無ニ

日ぐくくの鳴山雲の文だれハ風より外ふらふ人もあ

○ヒグラミノナク此山里ハユグレニハ風ヨリ外ニ面ニ尋子ラク
ル人モナイアセヒイコトヤ

あろろくをよめる 本家あえ方

あろろくあまあろろくあまあろろくあまあろろくあまあろろく

○侍人かきカエゾノヤウニケサ始テ雁ノ鳴ク声ガサテモツ

ラレウ心レルコトカナコチガ侍テ居ル人テハナイチヤケント

是良きこのあれあまのこ

とまのい

松風よそああろろくあまあろろくあまあろろくあまあろろく

もく國子^{ツッ}あ
と人胡^ハ野^ノ年
大くさくもれめて
雁ノ文とつれく
まへあまこつ
りこまも雁とま
つ人のつれく

これもあまの古事ニ
あろろくあまあろろく

○秋風吹く空ニアシ始テ雁ノ声ガサス雁ハ遠方カラ
状ヲクヒハ掛テ掛テ来ルト云フ子ヤガアノ鳴雁ハドコカラ
来カ状ヲカケテキタリチアヤラ

歌一ツ

よき人あらず

箱負者いづくか
かきこもあはれ
さかき海せりとる
ふ或は中夫
ふふふのあはれ
ふむんぬおあは
ふゆをよきあはれ
ふふふてこも
ふふふあはれ

コトハトハ箱負者の鳴かへりさ吹風不雁まきふり
○コトハトハ箱負者カナクニツレテハ風ニ雁ガキタリ
いとやも鳴ぬ雁うあき春の色もあはれあはれふ
○キツク早ウマア雁ハナイタリカナ 玉あはれ下ル木茂モタ
ロクニモコチモセヌウチニ

夏の子ハ夜
アの鳴くこと

直は林かの人
あはれのこと
あはれのこと

喜慶くすみていあーつぐぬ今ぞ鳴あはれ秋あはれの人
○春霞ノ中人カシミニ見エテイダ雁ガツ時ノ霞上内ニヤ
ウニ秋ノ妻ノウノ方テアレ今サ又ナクワ
秋を多々ニ不雁うねあはれは秋のト多あはれあはれ
○夜カ寒サニ衣ヲカルト云名ノ雁ノ鳴クニツレテ秋ノ下葉
モウツロウタワイ

此身あはれ人のいづくかあはれあはれあはれ
寛平此時きさの宮此の宮のうと

後永昔根朝長

丁の足音を舟と
 思ふすやうにも
 されと文辭ニテ擧
 げたるは、声と
 振とを、声と受
 け、て声と、情
 振と、舟と
 思ふ

秋風不声を、やまわけて、くさね、あまの、と、後、も、と、あ、る

○ア、レ、く、ア、ン、ま、イ、海、ヤ、ウ、ナ、ラ、ラ、秋、風、ニ、声、ヲ、ま、ウ、帆、ノ、マ、ウ

ニ、ア、ケ、テ、船、ノ、ヤ、ウ、ニ、見、テ、来、ル、モ、ハ、鳴、テ、ハ、瓦、雁、チ、ヤ、ウ、イ

みの、鳴、を、を、受、て、よ、め、る

こゝろね

う、ね、と、を、あ、ひ、つ、ら、ぬ、て、雁、が、ね、れ、お、き、こ、そ、始、れ、秋、の、よ、め、く

○雁、ノ、ク、ツ、モ、ツ、ラ、ウ、テ、鳴、テ、ハ、瓦、ヤ、ウ、ニ、オ、シ、秋、ノ、夜、ノ、ウ、イ

一、ノ、船、ノ、オ、モ、ヒ、ツ、ダ、ケ、テ、毎、夜、く、泣、テ、サ、ア、カ、ス、ウ、イ

是、を、み、て、の、家、は、あ、い、の、う、こ

如夢

山、裏、の、林、ノ、こ、ろ、に、び、り、と、あ、る、の、鳴、音、不、目、と、ま、あ、つ、く

○山、裏、イ、ツ、モ、ト、云、ウ、キ、ニ、秋、カ、サ、別、レ、テ、ツ、ラ、ウ、ナ、キ、ニ、云、ハ、レ、ル

ワ、イ、ヨ、ル、く、無、ク、チ、ウ、声、テ、目、ヲ、サ、マ、シ、ク、夜、ハ、長、シ、何、ヤ、ラ、カ

ヤ、ラ、ト、難、美、ナ、リ、ヲ、名、ヒ、ツ、ケ、ラ、レ、テ、サ

よとくあふげ

お、く、山、ノ、も、も、ら、あ、ら、ひ、け、鳴、音、の、あ、ま、受、付、を、秋、ハ、分、れ、し、き

○秋、ハ、想、伴、カ、ナ、ク、時、節、キ、ヤ、ガ、其、秋、内、デ、ス、ト、ウ、イ、フ

時、カ、イ、ツ、チ、悲、シ、イ、ツ、ト、ト、ハ、紅、葉、モ、モ、ウ、散、テ、シ、ラ、ウ、タ

万、葉、の、山、の、こ、ろ
 秋、ノ、音、ノ、あ、ま、受、付、を
 無、ノ、想、伴、カ、ナ、ク、
 時、節、キ、ヤ、ガ、

奥山村は遠く
の幸よは秋風
をくちまきし
あり

奥山デソノチツタモミギヲ 鹿ガマウヲテアルイテ鳴声
ヲキク時分ガサ 秋ノウチデハイツ年悲クイ時節チヤ
あつちけの鹿此ぬもむあり。

歌一ら

秋萩よこびれとれびりしの山あふもも鹿の鳴らん
○萩葉冬枯テイクラ見テ 時節ノ物カチ年ニ此
ヤウニウチラナゲテ居ルニトウエーデアノヤウニ山
下マデヒクホド鹿ガ鳴コトヤチアラノ鹿ノ声ヲキケイヨ、
悲トウテドウモタヘラトニをれどとふのこ。

あつちけの鹿とセ
き者のうらみと
をくちまきし
あり

秋萩とあつちけの鹿をきく鹿のめまハアガてき
○野萩ノ中ヲフミアラテオシラセテガラムニレテ鳴テアル
ク無ノ目ニ見イデアヤア声ノリヤカニヨウ安ユルコト
。千林云、其ハ鹿をこの鳴と急ともわく
わく。万葉集のわくともあり。
是れこの家此の言よあり

あまのきの鹿はよけりき紗の女の鹿をきやあつちけ
○アノ萩ノ葉ガイタウイ 山ノ鹿ガモウチラテアラウガ
わくあひあつちけの人の萩の野あつちけ

萩と鹿の妻と
もたそあれよ
ハそのんもあつち

みへ 野もこも枯
てま ありま
るあり 又 茎ま
と ありま
まよ ありま
こん ありま
本 ありま

ひら ありま
と ありま

おどろくしうしうふあ

いんね

秋萩のやうなままきるをんねのふはこるまきりなり

○萩去年ノ古枝へアレアトホリ又茎弁イタラ見ル草

木デモマハカク年ヲバ忘ルシマセヌワイ スレヤフコモトモ

中絶ハ致シタケド 先年ヨコイニ致シタハオ忘ルハナサ

ルマイ

野〜ん

よき人あらず

秋の下のまきりつくとありやひらうわりのぬきあす

まど〜てひらの
もこ〜とさぐて
わの〜んとよふ
す〜とよ次でト
日ハおかりふれ
の〜とあひま
さるあ〜とあ
あり

○萩下まきりつと枯カチテキタア 涙ト夜ハ長ウナラウ

レモウコレカラ又オレガヤウチ 独ズル者ナラヌテアラウカ

イ。ナ萩云此のあり

鳴ゆるうの涙や流つらんおろふ高れ萩乃う人の露

○アハテ、悲レイコチノ庭ノアノ萩ノウヘまカキツウ シゲ

ウオイタガソラウワタル雁モオレガヤウニカナレイノカア

ルカレテ 泣テイウ スレヤアノ雁ノナク涙ガオチタノカ

ラヌアノ萩ノ露ハ

萩の露あふぬくとさけけぬよりえん人の枝あ〜とよ

たつと、つらいつと
とらふと、つらいつと
とらふと、つらいつと

○ 萩ノ露ガキラウトシテアソリ見テサニ玉ニシテツチカウト
ルテトタレバギキニ消タエイフソニテ見ヤウトル人ハ
トラスニヤハリ枝ニアルマデ見ヨサ

あゝ人のつらき世のつらき世をこれにぞあはれと

とて足バキをききき萩萩の枝もたらしめぬる公を

○ 萩ノ露ヲモヒツクトウホドオイヤアノ露ガキツウ見
事ナガアレヲ折テスヤウトシテナラサタメテ落テシテウ
テサアラウ

萩ノ露ちとらん小所の露をわすれぬとてと終人さあはれと

○ 今夜妹がトコロヘイカウトル野道ハ萩ノ露ガササテ
サソ露モフカイテアラウガヨウヌレイカウツ夜ガフテ
テ露ハシゲキトモ 露ヲおといふは露の工とカ
るふ子多し。露多し。 萩ノ露をよみてとてのぞみ
是れ又みよの露れをよみてとてのぞみ

夕露のあきやす

○ 萩ノ露ハ玉子ヤカシテ 露ノ糸スガヘツチイテカクタ
萩ノ露ハ玉子ヤカシテ 露ノ糸スガヘツチイテカクタ

影しらす

信正通紙

毛織モおほいなる
ておのしとをわと二つ
あつちあつちこの
さあよつとハれま
てまああつちをま
なてつとつとま
子こあつちのつと
トもとをわとつと
あつちとつと
成程子あつちと
二つとつとつと
つとつとつとつと
とつとつとつと
唯所とつとつと
まつちとつとつと
ホ 露氏おほいなる
雨衣のおほいなる

まゝに子アキまつ
まゝに花とんす
もて女のこまて子
のまはすもて
今も 離 隨 園 隨
華のち説あり
まゝにくハま秋日
元子とてくハ撤
男とての

名あでしおれはくろぞ女とてさうれおちまると人の子くは

○女師をト云名ガヨサニ 千ヨツト馬カラオリテ見タハカリ

ガヤヅカララズ オガ女ニオチタト人ニミテハナイゾコ

ふれ云そのまおれまきやまの法師つねまきま

のりてあまきしと女のまおれくこえさう

とハるようおれくるをいふとまへしとおさるまお

らげおまきさうく

修心海眼くもてまあく人あつたつ時よとて山

ゆくととあつととてよえん

さるのいまこち

こまにうしこまハ
おまはるあつり子
まてとこまお
おまはるあつり子
おまはるあつり子
おまはるあつり子

○アノ女師花ぶでイ名ラナ女チヤト云テオレハヨソニ見

テサ通り過テイココハ男山ナハ 男中ニミツテ居ル女

チヤト云フニヨツテサ

是女とて此家の女合けう

らーやまの船尾

林の所ハありはすへ女とて名をばあしと云様あをま

○トマルテラ秋舞ニトマカヨイ 女師をカつら女とて名

ガムツマナニヨツテ 舞ルヤウデハナイワサテ 二の白れを

上のまゝと贈るの
やうなやう

いづれふとくぐり。 舞材打交とまふとまふとす

目より。 。子林を必まきまふよふあゝでん。孝一の森と
たおれてたふよて寐るを寝ぬとるを孝一の

舞〜〜

まのよ〜〜

女をまゝとる舞（ふやう）のまをま（ま）のまをま（ま）

○女部まゝとる舞（ふやう）のまをま（ま）のまをま（ま）

ナ名カタウカレラヌ 女部ト云ハ名カタリテコソケレホ

ニノ女デモナイニ

米産陳のま（ま）〜〜（ま）〜〜

左のま（ま）のま（ま）のま（ま）

古四十七

ま（ま）のま（ま）のま（ま）のま（ま）

○マ（ま）のま（ま）のま（ま）のま（ま）

ナビラヤラ 心ひつとのま（ま）〜〜

後承定方朝臣

秋あゝで重正とてま（ま）〜〜

○天ノ川ヨシキル女ノ秋デナウテハアノ女即ちハ

アノ川ノカハラニエテアルデモナイニ 秋デナウテハア

ノカナリカタニ女ナヤ

後承定方朝臣

一のま（ま）のま（ま）のま（ま）のま（ま）
一の本（ま）のま（ま）のま（ま）のま（ま）
一のま（ま）のま（ま）のま（ま）のま（ま）
一のま（ま）のま（ま）のま（ま）のま（ま）

六世子このあつ
 が杖にあらぬち
 のこゝとありお
 うんおあつうの
 形こゝ六世もま
 まつゝさふおあ
 いかのあつうと
 言しすまきこ
 ままきハいまま
 てふよのあつ
 その用ゆりま
 のことま

誰が能^カタトイフ秋^キテモ十一ニ女^メ即^チ去^リドウ女^メツア
 ンヤウニ色^シテテ眼^メデマ^ダ卑^イニウツロウム
 とはね

妻^メコウ鹿^カぞ鳴^ケ。とま^ア下^ノおの^クすむ野^ノの^カも
 ○アと妻^メヲコにもウ鹿^カガサヤシク口^ノ飛^トヤウガヤ女^メ命^メ

茶^ヲ巴^カカヨウ野^ノ花^チヤトハ知^ラヌカ^イ女^メ即^チ去^リト
 イハ女^メガヤニナゼアハヌツイ
 女^メふ^ク吹^クとて^ク林^ノ尾^ハハ^メ子^ハ足^ヲな^ク香^トと^クあ^ルは^シ

○女^メ即^チ去^リ吹^テトホツテクル風^ハ目^ニハツレト足^ヲ又^テ今^レト
 ト女^メニ逢^テキタ男^ノウツリガノスルヤウチ女^メ即^チ去^リ吹^テ
 キヤト云^フガ香^ヲシヨウレロイ
 たはね

人の^メ子^ヲとや^ク死^シと^キま^ハ一^ノ世^ヲも^アと^キま^ハら^ズら^ズ
 ○女^メ去^リ女^メ入^ルヌツカガツテカタレルヤウニ香^ヲシヨウレロイ
 ツカリアルガドウ云^フデア^ハヤウニ香^ヲシヨウレラ^ルヤ^ラア^レモ^ハ
 足^ルガ^メイ^ロク^チカ^イ
 ひ^ろう^ノの^メあ^つむ^らよ^ハ女^メ去^リ去^リは^シ候^ヘと^キま^ハら^ズら^ズ

白^ク性^ノ天^ノ香^ノの^メま^ま
 西^ノあ^つハ^ハあ^つす
 くの^メあ^つさ^つま^ま
 一^ノと^キま^ハら^ズら^ズ
 身^ヲハ^ハあ^つす^カあ^つ
 三^ノと^キま^ハら^ズら^ズ
 え

女^メ去^リ去^リは^シ候^ヘと^キま^ハら^ズら^ズ

まゝと見えそ
まゝと見えそ

うらめしくハ
うらめしくハ
うらめしくハ
うらめしくハ
うらめしくハ
うらめしくハ
うらめしくハ
うらめしくハ
うらめしくハ
うらめしくハ

○女ぬをヨ此野原ヨウヤウニテヒトリシホト

シテバツカリ居ヤウヨリハオカヤドノシテ植テ見ハヤレテ

ヤラウモノヲ 條林子と云ふハ一。おまこら。云ひ

まゝとハ一のちとあるやうにハあるが
女の男をさへしてはりあさうにまゝと

ゆのへあさうにハ人の家とてれハ一うゑたを

まゝとハ一のちとあるやうにハあるが

女らむうしあめたぐもアめまふあれる高子ひくろたてり

○アノ女脚をハ けアノタヤドニ 足ハ人モツカニ 別々ニ居レ

バサテモアモツカイナ物カナ

獲んとてくね
まゝと見えそ

あつたうとく
言のまゝと見えそ

○足ナ色ヲ花ヲハライツハイ エニスニナセニ此ヤウニカハ

ルヤラ女脚多クテル所テ コヒハ子ヤウテアツクモ

ノヲ 女ト名ナレバヨイトマリ所チヤニ

是貞との家此女子とあり

さうめきの朝日

中平此時獲人のと此ことさる所みま見むと
てまうたりたり村之とていふことよみん

いくふあめ 平さきぬむ

襦袢の言はよめて
形子綴りひきき
さきほくしき
はるをひきき
且この言はかき
よはくはかき
実子身はひき
てはきよめ

あやしくはひき
人の言はかき
信子ハカき
るが此集の言

おし人がききぬぎかき後をぬぎたどお所べとよをぬ

○此フチカハハカカタ何人著テヌギカケテオイタ襦

毎年く秋テハ此野ニテホハス今ニ此ヤウニホウハナテ

モコレハナクタイテイノ人ノ襦テアルイヨクくもくノ人

襦テ香ガヨウレテアルユエデアラウ

後襦をよめて人子つろく

はくせき

せうせー人の言はかき後襦はかきき香よめぬ

○此後襦ハイツヤ此方デオ上リナサレタそねノ形カタニオ

イテハ後リナサツタ襦テユサルガ今ニワスガタイ香ガホフ
デサ せねノイヲオナツカレウ存ズル

せねぬまよめる そせい

ぬーあぬをぬぎ自レ此の所ハ此ぬぎきき後襦は

○此フチカハハは林ノ野ヘタガヌイデ掛テオイタ襦ハニテ

主ノレヌ香ガサニホウテアル

襦 平、あま

なゆらうぬぎぬぎ花すきぬ子出る林分ひひひ

○スキハドコニモ多サニアル物チヤガソレヤドウモセウカナイ

いまはよめ
てくハあま
すく襦
とあまハあま
軒あまあま
あり

これハ袖と袂也
てあやせし
さす袖ハ衣ノ
なりと、子の袖乃
年々、解のちを
と

チヤガ 今カラセメテハコチノ庭ニナリトモ極テハ又ヤウ
ニセウグ アノヤウニ薄ノ穂ガデ、秋ノチレキガ又エバキツ
物ガナレウテナギナワイ だまなるものごとく
御材ぶのきまやとまらぬ

寛平、以耐きさの宮にあらるの衣

在系、おねやち

秋の野比、そのたよりをすまきわよどまねく袖とふららん
○スキノホノ風デナド、ハチウド人が色ニテ、意トイ今子
ク袖ヤウラエガ スキノ穂ハ、秋ノ野ノ穂、草ノ袖カレラ

古也、廿一

又、此のあはく袂と袖とを、何と云ふものか、あてはド
と
○十秋云々、うらまへ、うらまへ、
の、枝、の、許、み、く、ら、る、べ、し。

妻、性、師

やま、く、赤、下、ハ、群
子、あ、紅、袂、色、の、春
之、色、ハ、何、向、ハ、ソ、ハ
へ、よ、う、生、れ、ハ、ソ、ハ
を、け、し、く、ま、る、ま、く
の、色、は、ハ、春、を、で
と、ま、る、は、む、し、
や、ま、く、ま、る、は、む、し、
言、ハ、あ、は、

これの、ま、あ、は、ま、と、ま、ん、ま、ぐ、く、す、何、々、の、ま、ま、と、ま、ぐ、と
○キヅ、く、ス、カ、ウ、テ、オ、モ、シ、ロ、イ、ユ、カ、ゲ、ニ、見、る、ニ、候、テ、ア、ル、ア、ノ、撫、子
ト云、見、ヲ、 母親、ヤ、乳、母、ナ、ド、モ、打、ソ、ロ、ウ、テ、ト、モ、く、ニ、テ、ウ、ア、イ、ス
ル、ヤ、ウ、ニ、タ、レ、ニ、モ、カ、レ、ニ、モ、又、セ、テ、賞、翫、サ、セ、タ、イ、モ、チ、ヤ、ニ、多、々
一、ス、ノ、キ、デ、ソ、ダ、テ、ル、見、ノ、ヤ、ウ、ニ、オ、レ、バ、ツ、カ、リ、ガ、ア、ヨ、イ、見、ヤ、ト、云、テ
狎、リ、ス、ヤ、サ、ウ、カ、ヤ、ア、ツ、タ、ラ、此、花、ヲ

このころに人々のま
ついでにわがま
もあつたれいし日本
犯す結婚の二重と
ついでにわがま
もあつたれいし日本
犯す結婚の二重と

鮮持塔の流ちうーおまらうー

歌一

よこ人あう

さうあひらつ草ぞとまふ一杖の色とのままでありたる

○春見文時ニ冬皆同じまふ一ツの子がヤトバツカリ名フタカ

サウデハナイ 秋手て今見ビ コレヤウニイコノ弁足ゴトナを

チヤウイ

さうあひらつ草ぞとまふ一杖の色とのままでありたる

○ソウタイを開クヲ細トクト云ガヤガ 此ヤウニイコノ弁足ゴトナを

まの花帯細トイテくまレテアル面白イ秋ノ野デドレヤコ

の下母をがまの
はなをさるともれ
はな

月を八分まで
のあつたかた
ハなすすうらむ

うらふあつたかた
石上のうらむ
のこ

チモアノをマ愛散ニトモくまレテ アハウラツタマウ人

ガ足女ナラアハア何事ヤトアハニニ及フデアラウガ 元セ

元セ

月子子さあもハすらん朝あまねれてのちうらひぬやま

○キルモノヲバ月子をむテスヨウ 牙色ヲ物ガヤニシタカ外ハ色

ノウウリヤマイ物ガヤニヨテ 朝ウニニとウラ 色が外ハモ

ヘウウテレハハカモレシガチイ守 後ニウウタネニテモ

仁おのうらむみとあうーまうら付あうのたま

後せんとしてあうはうらうらまうら付あうのたま

アまうらる付ふるど杖のふつらうておる人お
ぢうのつらでよまてきうらる

傍心通服

里おれてんらうりや^{ヤド}宿あきや^{ヤド}居もあきま^{ヤド}杖の形うらる

○此やう美ハ^{ニハ}黒ア^{ニハ}ア^{ニハ}シマ^{ニハ}多^{ニハ}里^{ニハ}之^{ニハ}住^{ニハ}テ^{ニハ}ラ^{ニハ}リ^{ニハ}ス^{ニハ}ル^{ニハ}者^{ニハ}ハ^{ニハ}老^{ニハ}人^{ニハ}之^{ニハ}夜^{ニハ}

シ^{ニハ}ス^{ニハ}ト^{ニハ}諸^{ニハ}事^{ニハ}下^{ニハ}都^{ニハ}合^{ニハ}ナ^{ニハ}宿^{ニハ}エ^{ニハ}工^{ニハ}カ^{ニハ}夜^{ニハ}シ^{ニハ}テ^{ニハ}庭^{ニハ}モ^{ニハ}休^{ニハ}離^{ニハ}モ

以^{ニハ}後^{ニハ}下^{ニハ}サ^{ニハ}シ^{ニハ}マ^{ニハ}ス^{ニハ}ト^{ニハ}あり^{ニハ}ト^{ニハ}ト^{ニハ}ハ^{ニハ}ヤ^{ニハ}杖^{ニハ}ノ^{ニハ}野^{ニハ}原^{ニハ}デ^{ニハ}ガ^{ニハ}リ^{ニハ}マ^{ニハ}ス

上^{ニハ}向^{ニハ}の^{ニハ}示^{ニハ}の^{ニハ}を^{ニハ}の^{ニハ}ぐ^{ニハ}ん^{ニハ}を^{ニハ}ら^{ニハ}く^{ニハ}る^{ニハ}。

頭書古今歌集を讀奏第四

丹のらふま
のまわくわの
まわくわのま
まわくわのま
まわくわのま
まわくわのま

